

要と考える。今後、これらの症例を詳細に検討することにより、医科入院所例ばかりでなく、在宅医療の治療指針に結び付けたいと考えている。

### 13) インド人頭蓋骨成長発育に関する研究

○志賀 華絵, 齊藤 博, 祐川 励起  
鈴木 陽典<sup>1)</sup>, 高橋 和裕<sup>1)</sup>, 伊藤 一三  
(奥羽大・歯・生体構造・歯放診<sup>1)</sup>)

(目的) 頭蓋の成長発育に関する研究は、日本人を含む各種人種での報告がなされている。特に近年では、インド人頭蓋骨を用いた報告が多数されているが、日本人とインド人の成長発育の違いに関する報告は少ない。今回、インド人頭蓋骨の頭部エックス線規格写真撮影側貌を撮影し、Downs法やNorthwestern法のSkeletal patternを中心に計測・分析を行なって、歯科臨床で広く用いられている飯塚・石川の計測値と比較し、日本人とインド人の成長発育の違いについて検討した。

(材料と方法) 当講座所蔵のインド人乾燥頭蓋骨110顆(乳歯列期, 混合歯列期各30顆, 永久歯列期50顆)について、咬頭が嵌合する位置で上・下顎骨を固定し、頭部エックス線規格写真の側貌を撮影した。現像処理後、トレース図を作成し、SNA, SNBなど骨格系の8項目について計測し、飯塚・石川の計測値と比較した。統計は計測値より平均, 標準偏差を求め、同一人種における各歯列期間の差を一元配置分散分析, 各歯列期におけるインド人と飯塚らの計測値の差をt検定にて、危険率1%で検定を行なった。

(結果と考察) インド人の計測値についてSNAは82度前後, SNBは76度前後を示し, 各発育段階間で有意差は認められなかった。また飯塚らの計測値とも有意差が認められなかったことから, 両者とも頭蓋底に対する上・下顎骨の相対的な位置は経年的に変化せず, 両者ともほぼ同じであると考えられた。上顎の成長発育について, インド人のSNA値やConvexityの値が大きく, FH-S・Pogが各歯列期間で有意差が認められなかったことから, 日本人に比べて上顎の前方への発育がよいと考えられた。下顎の成長発育について, インド人のRamus angleは日本人に比べ値は小さいが変化の傾向は日本人と同じであり, Gonial angle

Mandibular plane angleの変化が少なかったことから, インド人では下顎角の経年的変化が少なく, 下顎枝の後方傾斜が強い形態を示しているものと考えられた。また, FH-S・Pogが各歯列期間で一定であり, Facial angleの値がわずかに増加傾向を示したことから, 日本人で認められるオトガイ点の後退は, インド人では認められないものと考えられた。

### 14) 幼児の口腔衛生状態と養育者の口腔保健行動に関する研究

○車田 文雄, 結城 昌子, 宮澤 忠蔵  
(奥羽大・歯・口腔衛生)

(目的) 福島県S村の保育児の口腔内環境を調査する機会を得たことにより, う蝕発生に関連する要因について解析, 検討した。

(調査対象および調査期間) 対象は平成14年度1歳6か月健診においてう蝕の無かった3歳時健診受診者35名(男児16名, 女児19名)で, 期間は平成14年4月から16年7月までの間であった。

(調査方法および解析方法) 1歳6か月と3歳時健診結果およびアンケート調査票から, ①家庭環境, ②食習慣, ③生活習慣, ④養育者の歯科保健行動におけるう蝕発生関連要因について後ろ向き研究(症例-対照研究)の手法でオッズ比およびカイ二乗検定より因果関係を推測した。

(結果) 3歳時において「う蝕有り」と「1日3回以上の甘味食品摂取有り」との間に有意性があった。また1歳6か月および3歳時においても「う蝕有り」と「仕上げ磨き有り」との間に有意性が認められた。

(考察) 3歳時におけるう蝕発生と「1日3回以上の甘味食品摂取有り」との有意性から, 1歳6か月時には離乳完了期でもある1歳3か月時の延長として, 養育者自身も間食には気をつけ, おにぎりやふかし芋, 果物等を与えていたが, その後甘味の嗜好を覚えてしまう幼児には, 養育者自身が余り注意を払わず, 今回の調査ではスナック菓子やビスケット等のいわゆる歯垢形成食品をおやつとして3回以上の1回は摂取していたことに起因するのではないかと思われる。また1歳6か月および3歳時におけるう蝕発生と「仕上げ磨き